

「園芸」をテーマとした絵本を探す

山田幸子

子どもに「園芸」の楽しさを知ってもらいたい。それには、親が実際に園芸を楽しんでいる姿を見せること。子どもが植物に触れ、植物を育てることのできる環境（機会）を作ること。そしておとなが子どもと一緒に園芸を楽しむこと。これがそのためのプロセスであることは、いうまでもない。だがその上で、植物に興味を持ち、植物を育てるおもしろさを知るきっかけとして、“絵本”が大きな役割を担ってくれるのではないだろうか。

さてそれでは、この役割を担ってくれる“絵本”はどのくらいあるのだろうか。子どもたちを「園芸」の世界に引きずり込むような、素敵な絵本は実際にあるだろうか。これは次世代園芸愛好家人口拡大のために、早急に調査・活用の方策を立てねばならない課題である。まず調査を開始した。

絵本を収集・選択

現在入手できる日本語の絵本を対象とした。書店の絵本コーナー、絵本専門書店、インターネットなどで、タイトルに植物名、花、木、タネ、葉、畑、森、庭などの言葉を含む本を中心に収集。約100冊になった。これを本の記載に準じて、対象年齢別に分類。その中から、まず“私自身が楽しめる絵本”を選択した。

とくに幼児の絵本は「読み聞かせ」を前提としたものであり、子どもは「絵」を見ながら、「文」を聞き、次の画面を想像する。そしてページをめくる。新たな「絵」を見て感動し、「文」を聞く。子どもはドキドキ、ハラハラさせられるもの、登場人物と共感できるものを喜ぶ。したがって、絵本とはおとなと子どものコミュニケーションの方法のひとつであり、子どもと楽しい時を過ごそうと、おとなが読んであげたくなる本である。そのためにはまずおとなの私自身が楽しめる本であることが重要であると、認識するからである。

なお、「園芸」をテーマとする絵本とは、本の中にタネをまく、苗を植える、水やりをする、収穫するなど、「育てる」行為のあるものと定義した。

収集した絵本の中には、植物そのものの姿、生長のようす、四季の変化などを捉えた内容で、植物に「親しむ」をテーマとする素晴らしい絵本もあるので、取り上げてみたい。植物と遊び、親しむことから、園芸に興味広がる可能性が強いと思われるからである。

子どもに読んでやりたい本 子どもが読んでほしい本

2～3歳から

赤ちゃんが絵本に興味を示すのは満1歳頃から。書店、公立の図書館等では「初めて出会う本」「おひざで読む本」などのネーミングでコーナーを設け、本の数、内容等も充実している。そして2～3歳になると、言葉に対する力が発達し、簡単な筋を追って物語を理解することができるようになるといわれている。

1 『おひやくしょうのやん』（ディック・ブルーノ / 文・絵 松岡享子 / 訳 福音館書店1984初版発行：以下同 オランダ1984原本発行：以下同）「初めて出会う絵本」の作者として知られ、多数の本があるが、植物が出てくる本はこれだけ。畑に花のタネをまき、タネを食べに来る小鳥を追い払い、きれいな青い花が咲かせる。

2 『ぼくのはたけ』（ビジョー・ル・ツール / 作・絵 掛川恭子 / 訳 カワイ出版1994 アメリカ1984）ウサギの畑仕事。タネをまき、育てて収穫し、秋になったらおしまい。単純化された鉛筆画がユニーク。

3 『うえきやのくまさん』（フィービとジョーン・ウォーントン / 作・絵 まさきりこ / 訳 福音館書店1987 イギリス1983）ある一日。午前中は隣の庭の手入れ、午後は畑で収穫した野菜や花を販売する。

絵本の世界では、動物が擬人化され、立って歩き、話をするのは当然のこと。子どもは違和感なく受け入れ、かえって親しみがわくようである。

4 『いちご』（平山和子 / 作 福音館書店1989）畑のイチゴの冬の姿から、春を待ち、花が咲き、実がなるまでを追う。待つことの大切さを丹念に描いている。「いただきます」で終わるが、イチゴがおいしそう！



2～3歳からの絵本

「はたけでそだっただいこん。やおやさんにならびました」で始まる5『やさしい』(同1982)とともに、食べるものから植物に興味を導くのも効果があるようだ。

6『りんごの木』(エドアルド・ベチシカ/文 ヘレナ・ズマトリーコパー/絵 うちだりさこ/訳 福音館書店1972 チェコ1954)小さなりんごの木が秋に赤い実をつけるまで、小さな男の子は不思議をいくつも発見する。43刷と長く支持されている絵本。

7『ぴよちゃんとひまわり』(いりやまさとし/作・絵 学習研究社2004)ひよこのぴよちゃんが見つけた1粒のタネ。葉をふやして食べるつもりで育てたヒマワリと仲良しになる。

8『くりちゃんとひまわりのたね』(どいかや/作 ポプラ社2004)ハムスターのくりちゃん。大好物のひまわりのタネをふやすために3粒タネをまく。大きく育てて花を咲かせ、友達と一緒に収穫してパーティー。

9『14ひきのかぼちゃ』(いわむらかずお/作 童心社1997)14匹のねずみの家族。おじいさんが持っていた南瓜のタネをまく。芽が出るまでのハラハラ、ドキドキ。花が咲き、小さな実を見つけたときの感動も共感。収穫して、かぼちゃの料理がたくさん並ぶ食卓もうれしい。「14ひき」はシリーズ化されているが、どれも自然の情景がていねいに描かれていて楽しい。

10『ぐりとぐらとすみれちゃん』(中川李枝子/文 山脇百合子/絵 福音館書店2003)のねずみのぐりとぐらは朝起きるとすぐに畑仕事。すみれちゃんが大きなかぼちゃを持ってやって来る。森の動物と一緒にかぼちゃの料理。たくさん食べて、タネは庭の畑にまく。

さて、小さな子に人気のある花はチューリップのようである。

11『でてこいちゅーりっぷ』(いもとようこ/作・絵 金の星社1982)「こねこちゃんえほん」シリーズの1冊で、34刷の人気絵本。球根を植え、なかよしのうさぎとねずみといっしょに水をやる。でもやりすぎでもぐら一家が引越すほど。

12『チューリップのにわ』(芭蕉みどり/作・絵 ポプ

ラ社1992)のねずみの子のティモシーとサラは球根を買いにでかける。絵がきれいで女の子が喜びそう。「ティモシーとサラの絵本」シリーズの1冊で、31刷。同シリーズ13『はながさくころに』(同2004)もある。

この年齢向きには、ほかに14『くんちゃんのはたけしごと』(ドロシー・マリノ/作 間崎ルリ子/訳 ペンギン社1983) 15『もーいいかい まあだだよ』(平出衛/作 福音館書店2001) 16『くまのこミンのおはなばたけ』(あいはらひろゆき/文 あだちなみ/絵 ソニーマガジン2005)も楽しい。

4～5歳から

17『おじいちゃんのはたけ』(ジャンヌ・ブベール/作 富山房編集部/文 富山房1993)絵を丹念に見て楽しみたい本である。見開きのページはすべて同じ畑。季節の移り変わりにつれて様々な畑仕事があり、いろいろな野菜が育っていくのを細かく描いている。描写が面白く、土の中のジャガイモやニンジンまで描いているが、子どもにも分かりやすいだろう。

さて、ありっこないけど子どもがおもしろがる「ナンセンス絵本」といわれるジャンルにも、「園芸」をテーマにしたものがある。

18『すいかのたね』(さとうわきこ/作・絵 福音館書店1987)ばばあちゃんはスイカのタネを庭に植えた。こねこがほじくりかえす。「なんだつまらない」と埋める。犬も、狐も、ばばあちゃんもほじくりかえす。怒ったすいかのタネがいきおいよくつるを伸ばして大きなスイカの実をつけた。「これでもつまらないか!」ばばあちゃんは子どもたちの人気者である。

19『そらいろのたね』(中川李枝子/文 大村百合子/絵 福音館書店1967)ゆうじは飛行機をキツネの空色のタネととりかえっこ。庭に植えると、翌朝出てきた芽は空色の小さな家だった。水をやると大きくなる。友達も動物もみんなが入れるくらいにどんどん大きくなる。25年以上、80刷の人気絵本である。



4～5歳からの絵本

20『みどりいろのたね』(たかどのほうこ/著 太田大八/画 福音館書店1988)畑に緑色のタネをまく。まあちゃんは緑色のあめもいっしょに。メロンあめをなめて生長したタネは、メロン味の実をつけたとさ。

科学の本

「科学の本」「知識の本」は4歳ごろから。この年齢には知識を与えるより、子どもの好奇心や興味をどれだけかきたてるか。おもしろい、楽しいが重要なようである。この中に「園芸」や「植物に親しむ」をテーマとした本がある。

21『ピーナッツ なんきんまめ らっかせい』(こうやすすむ/文 なかじまむつこ/絵 福音館書店1987)22『だいち えだまめ まめもやし』(同1992)は、どちらも食べるものを栽培することで子どもの興味を引き出している。23『マーヤのやさいばたけ』(レーナ・アンダション/作 山内清子/訳 富山房1996 スウェーデン1987)も同様である。

24『やさいばたけははなばたけ』(広野多珂子/作・絵 佼成出版社2004)おばあちゃんの畑でコマツナや大根など、野菜にも花が咲くのを知ってびっくり。トマトやキュウリは花が咲いて実がなることも知る。

25『ポットくんのおしり』(真木文絵/文 石倉ヒロユキ/絵 福音館書店1998)ポットくんのおしりにはなぜ穴が開いているのか。庭の隅に忘れられていたヒヤシンスの球根を試行錯誤しながら植える。

26『あかいはっぱ きいろいはっぱ』(ロイス・エイラト/作 阿部日奈子/訳 福音館書店2002 アメリカ1991)サトウカエデの木を庭に植えた子どもの話。仲良しになった木の四季の変化を描く。大きな赤や黄の葉が印象的。

27『ちいさいタネ』(エリック・カール/作 ゆあさふみえ/訳 偕成社1990 アメリカ1970)花のタネが風に乗って遠くへ運ばれる。春、小さなタネが芽を出し、小さな草となり、やがて大きな花を咲かせる。大胆な構図と色彩が子どもを惹きつけるだろう。

28『もりのえほん』(安野光雅 福音館書店1981)

文字のない絵本。子どもと、木々の間に隠れているリスやクマ、キリンなどを探するのがおもしろい。29『はるにれ』(姉崎一馬/写真 福音館書店1981)は、北海道の原野に立つハルニレの姿を追う文字のない写真絵本。こんな本から自然に親しむのも一興である。

30『じめんのうえとじめんのした』(アーマE. ウェーバー/文・絵 藤枝澗子/訳 福音館書店1968 アメリカ1943)「緑色の植物には、地面の上に出ているところと

地面の下にもぐっているところがあって、地面の上と下の両方に伸びています」。オレンジと白でページを2分。明快な絵が分かりやすい。

図鑑的な本では、31『はながさいたら』(菅原久夫/文 石部虎二/絵 福音館書店1984) 32『たねがとぶ』(甲斐信枝/作 森田竜義/監修 福音館書店1993)が見ごたえがある。

33『きいちごだより』(岸田衿子/文 古矢一穂/絵 福音館書店2001)動物たちが自分の村のキイチゴのことを手紙に書く形で様々な種類のキイチゴを紹介。

34『木の本』(萩原信介/文 高森登志夫/絵 福音館書店1986)は木の図鑑。季節ごとの花、芽生え、葉などが克明に描かれている。こんな本を持って、親子で木の観察に行ったら分かりやすい。

35『マザーツリー』(村田真一/文 松岡達英/絵 小学館1995)は白神山地に生えるブナの1年間を、そのまわりの植物や動物とともに克明に描いている。

小学校低学年から

この年齢になって、ようやく園芸の楽しさをじっくり語る絵本が現れる。

36『ジョディのいんげんまめ』(マラキー・ドイル/文 ジュディス・アリボン/絵 山口文生/訳 評論社2002 イギリス1999)インゲンマメをまく。「どうなるの?」という質問に、「見まもっていればわかるよ」と繰り返すおじいちゃん。日々世話をすること、生長のようすを見守ること、どちらも大切だと教えている。絵も楽しい。マメが生長していくようすがいねいに描かれている。同時に絵の中のお母さんのおなかも大きくなっていき、秋に赤ちゃんが生まれる。身近なおとなに教えてもらいながら子どもが植物の栽培を始める理想的なスタイル。実生活でも実現させたい。

37『はちうえはぼくにまかせて』(ジーン・ジオン/作 マーガレット・B・グレアム/絵 森比佐志/訳 ベンギン社1981 アメリカ1959)トミーは夏休みで出かける近所の家の鉢植えを預かるアルバイト。お父さんはブ



小学校低学年からの絵本

ツブツ。やがて家の中はジャングル状態。いかにもアメリカ的だが、育てる楽しさが伝わってくる。

38 『おおきな木がほしい』(佐藤さとる/文 村上勉/絵 偕成社1971)「庭に大きな木があったらいいな。はしごをつけて、上って行くと家があるんだ。またもっと上ると見晴台もある」と、夢は果てしなく広がる。

39 『木はいいなあ』(ユードリイ/作 シーモント/絵 西園寺祥子/訳 偕成社1976 アメリカ1956)とともに、木と過ごす楽しさが描かれている。どちらも最後に木を植えて終わっている。

小学校 中学年から

この年齢になると、植物との付き合い方もさらに発展し、園芸の力(効用)を物語る絵本も出てくる。

40 『みどりのゆび』(モーリス・ドリユオン著 岩波文庫1977 フランス1957)緑の指を持つ少年チト。親指で土に穴を開けると芽が出て花が咲く。刑務所やスラム街を花いっぱいにし、兵器にも花を咲かせて戦争を止めさせ、花で人を幸せにする。

41 『ルピナスさん』(バーバラ・クーニー/作 掛川恭子/訳 ほるぷ出版1987 アメリカ1982)海を見下ろす小さな家に住んでいるおばあさん。世の中を美しくするために、ルピナスのタネを村中にまく。

42 『ぼくの庭ができたよ』(ゲルダ・ミュラー/作 ささきたづこ/訳 文化出版局1989 オランダ1988)広い庭がある家に引っ越してきた家族の庭造りを追う。庭造りの入門書であり、庭の楽しみ方読本でもある。

43 『リディアのガーデニング』(サラ・スチュワート/文 ディビッド・スモール/絵 福本友美子/訳 アスラン書房1999 アメリカ1997)アメリカ不況の時代、町のおじさんの家に預けられた少女が店を花いっぱいにしてみんなに喜んでもらう。

44 『しあわせなモミの木』(シャーロット・ゾロトウ/文 ルース・ロビンズ/絵 みらいなな/訳 童話屋1991 アメリカ1972)枯れかかったモミの木を家の前に

植えたおじいさん。丹精して大きく育てると、小鳥が集まり、子どもたちが集い、憩いの場となる。

45 『植物あそび』(ながたはるみ/作 福音館書店1998)タネまきから草花で作るおもちゃまで、植物との遊び方のすべてが載っている。1冊あると便利。

46 『やさいをそだてよう』(鳥居ヤス子/作 かわさきようこ/絵 富山房1991)おとなの園芸書を子ども向けにわかりやすくした本。天敵などの話もある。

47 『木をかこう』(ブルーノ・ムナリ/作 須賀敦子/訳 至光社1982 イタリア1978)木を描きたくなる絵本。枝の先が2本に分かれる木、3本に分かれる木、それぞれ規則はあるけど、でも横に広がるの、縦に伸びるの、いろいろな形の木になる。

小学校 高学年から

48 『リネアの小さな庭』(クリスティーナ・ピョルク/文 レーナ・アンデション/絵 山梨幹子/訳 世界文化社1994 スウェーデン1978)子ども向けの園芸書の傑作。園芸が好きなったら、読んでほしい。

49 『ピーターラビットの庭しごと』(ジョニー・ウォルターズ/文 ローワン・クリフォード/作図 福音館書店1993 イギリス1992)子どもに人気のピーターラビットが案内する、園芸入門書。

50 『木を植えた男』(ジャン・ジオノ/原作 フレデリック・バック/絵 寺岡襄/訳 あすなる書房1989 フランス1983)山奥の荒地で男が一人、カシワやブナ、カバの木を育て続ける。やがて豊かな森となり、人々が移り住み、村が生まれる。

誌面の都合で一部割愛したが、「園芸」や「植物と親しむ」をテーマとした絵本があることは確かである。その数の多少や内容等については人それぞれ、様々な考え方があるだろう。だがまず、絵本を自らが楽しみ、子どもとのコミュニケーションを密にしようとするおとなになることが大切なのかもしれない。このリストを活用していただければ幸いである。



小学校中学年から絵本



小学校高学年からの絵本